

みんぱくリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology Academic Information Repository

民博通信 no.158; 表紙, 目次ほか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008485

民博通信

評論・展望

文明の転換点における人類学と博物館

民博の開館 40 周年にあたって考える

吉田憲司

No.158

2017



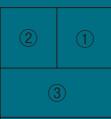
国立民族学博物館

目次

国立民族学博物館の研究	03
文明の転換点における人類学と博物館 —民博の開館40周年にあたって考える	
吉田憲司	04
楽器の分類とデータベースの作成 基幹研究●楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築	
福岡正太	10
「ご飯が食べられなくなったらどうしますか」 —永源寺地区の「地域まるごとケア」の実践から考える	
共同研究●現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	
浮ヶ谷幸代	12
手段としての動物と人とのかかわり —共通した動物利用の論理を探る	
共同研究●もうひとつのドメスティケーション —家畜化と栽培化に関する人類学的研究	
卯田宗平	14
情報通信技術(ICT)と人間の共生社会に向けての理解	
共同研究【若手】●テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	
平田晶子	16
高等教育における「ミュージアム体験」の可能性	
共同研究【若手】●高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究	
吳屋淳子	18
先住民から学び、変容する学問をめざして	
共同研究●政治的分類—被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する	
太田好信	20
宣教と適応—グローバル・ミッションの近世	
共同研究●近世カトリックの世界宣教と文化順応	
齋藤 晃	22
複数の「歴史」とポリティクス—中国的文脈と特色的解明にむけて	
共同研究●資源化される「歴史」—中国南部諸民族の分析から	
長谷川清	24
玩具にみる日本の近代史—アメリカへの複雑なおもい	
共同研究●モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究	
—国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に	
是澤博昭	26
日越交流史研究の新局面—ベトナム語ローマ字表記をめぐって	
樫永真佐夫	28
研究資料アーカイブズにおける資料情報の記述と公開	
—講演会「アーカイブズ・オブ・アメリカンアート(AAA)の	
すべて」より	
丸川雄三	29
研究成果の公開	30
みんなくのうごき	31

表紙写真

① 国立民族学博物館の特別展「イメージの力—国立民族学博物館コレクションにさぐる」での展示の様子
(本誌4-9頁)



② 95歳の女性を老衰で看取った直後、息を引き取った女性と手を繋ぐひ孫
(本誌12-13頁)

③ 水洗いした血抜き肉をイヌワシに与えることで、血に飢えさせて狩猟に駆り立てる
(本誌14-15頁)

民博通信 No. 158

『民博通信』は、国立民族学博物館の研究広報誌です。本館において、現在計画中、および進行中の研究について、その学術的な特色、独創的な点、期待される成果などを、研究者を中心に広く発信するのが目的です。



国立民族学博物館東アジア〈中国地域の文化〉展示場 花嫁の輿

民博通信 No.158

2017年9月29日

編集委員

宇田川妙子（編集長）
伊藤敦規
卯田宗平
藤本透子
三尾 稔

編集・発行

人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒 565-8511
大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話：06-6876-2151
<http://www.mnpaku.ac.jp/>

DTP・印刷・製本

中西印刷株式会社

国立民族学博物館の研究

【基幹研究プロジェクト】

人間文化研究機構は、人間文化の新たな価値体系の創出をめざして、国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進します。機関拠点型・広領域連携型・ネットワーク型の3つの類型から構成され、本館でもそれぞれのプロジェクトを取り組んでいます。

【特別研究】

「現代文明と人類と未来—環境・文化・人間」を統一テーマとし、環境、食、文化衝突、文化遺産、マイノリティ、人口問題という課題にかんして、それぞれ3年の研究期間を設定し、国際シンポジウムや欧文での成果刊行を行い、研究を実施していく。その作業を通じて、現代文明を人類学的な視座から再検証することを目的とする。

【共同研究】

特定のテーマについて、公募も含めて館内外の専門家を数人から20人程度集めて研究会をひらき、2~3年の期間で成果をあげる活動です。2017年度には、10月から開始される5件を含め33件の共同研究プロジェクトが組織されています。

【基幹研究プロジェクト】

プロジェクト名	研究代表者	研究期間（年度）
機関拠点型プロジェクト／人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築		
○開発型		
アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	飯田 卓	2017-2020
民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討	齋藤玲子	2016-2019
台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応	野林厚志	2015-2018
北米先住民誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有	伊藤敦規	2014-2017
○強化型		
朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究	太田心平	2017-2018
中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース	西尾哲夫	2017-2018
日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）資料の履歴に関する研究と成果公開	飯田 卓	2016-2017
日本の文化展示場関連資料の情報公開プロジェクト	日高真吾	2016-2017
楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築	福岡正太	2016-2017
中国地域の文化展示のフォーラム型情報ミュージアムの構築	横山廣子	2016-2017
北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究 —民博コレクションを中心に	岸上伸啓	2015-2017
広領域連携型プロジェクト		
文明社会における食の布置（「アジアにおけるエコヘルス研究の新展開」内のユニット）	野林厚志	2016-2021
日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築（「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」内のユニット）	日高真吾	2016-2021
ネットワーク型プロジェクト		
北東アジア地域研究	池谷和信	2016-2021
現代中東地域研究	西尾哲夫	2016-2021
南アジア地域研究	三尾 稔	2016-2021

【特別研究】

研究課題	研究代表者	研究期間（年度）
生物・文化的多様性の歴史生態学—希少動物・希少植物の利用と保護を中心に	池谷和信／岸上伸啓	2016-2018
食料生産システムの文明論	野林厚志	2017-2019

【共同研究】

研究課題	研究代表者	研究期間（年度）
課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究		
ネオリベラリズムの中のモラリティ	田沼幸子	2017-2020 ●
人類学／民俗学の学知と国民国家の関係—20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生勝美	2017-2020 ●
文化人類学を自然化する	中川 敏	2017-2020 ●
現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	浮ヶ谷幸代	2016-2019 ●
もうひとつのドメスティケーション—家畜化と栽培化に関する人類学的研究	卯田宗平	2016-2018
捕鯨と環境倫理	岸上伸啓	2016-2019
会計学と人類学の融合	出口正之	2016-2018
音楽する身体間の相互作用を捉える—ミュージックングの学際的研究	野澤豊一	2016-2019 ●
「障壁」概念の再検討—触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて	廣瀬浩二郎	2016-2018
考古学の民族誌—考古学的知識の多様な形成・利用・変遷過程の研究	ERTL, John	2015-2018 ●
医療者向け医療人類学教育の検討—保健医療福祉専門職との協働	飯田淳子	2015-2018 ●
確率的事象と不確実性の人類學—「リスク社会」化に抗する世界像の描出	市野澤潤平	2015-2018 ●
宇宙開発に関する文化人類学からの接近	岡田浩樹	2015-2018 ●
個一世界論—中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム	齋藤 剛	2015-2018 ●
放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究	中原聖乃	2015-2018 ●
応援の人類学—政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌	丹羽典生	2015-2018
グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	松尾瑞穂	2015-2018
驚異と怪異—想像界の比較研究	山中由里子	2015-2018
現代「手芸」文化に関する研究	上羽陽子	2014-2017
政治的分類—被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する	太田好信	2014-2017 ●
呪術的実践=知の現代的位相—他の諸実践=知との関係性に着目して	川田牧人	2014-2017 ●
近世カトリックの世界宣教と文化順応	齋藤 晃	2014-2017
資源化される「歴史」—中國南部諸民族の分析から	長谷川清	2014-2017 ●
家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究	森 明子	2014-2017
—保育と介護の制度化／脱制度化を中心に		
課題2：本館の所蔵する資料に関する研究		
博物館における持続可能な資料管理および環境整備—保存科学の視点から	園田直子	2017-2020
世界のピーズをめぐる人類学的研究	池谷和信	2016-2017
物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	繩田浩志	2016-2019 ●
チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究	長野泰彦	2015-2018
モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究 —国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に	是澤博昭	2014-2017 ●

○若手

研究課題	研究代表者	研究期間（年度）
課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究		
モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相	八木百合子	2017-2019
消費からみた狩猟研究の新展開—野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究	大石高典	2016-2018 ●
テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	平田晶子	2016-2018 ●
課題2：本館の所蔵する資料に関する研究		
高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究	吳屋淳子	2015-2017 ●

研究成果の公開——最近開催されたシンポジウム等から



北東アジアのガラス玉の道— アイヌのタマサイを中心に

日時：2017年3月25日（土）
場所：国立民族学博物館
主催：人間文化研究機構基幹研究プロジェクト 北東アジア地域研究国立民族学博物館拠点
企画：池谷和信

わが国における先住民アイヌ（Ainu）の人々によると、ガラス製の首飾り（タマサイ）。シトキと呼ばれる金属板がつくこともある）は、13世紀から14世紀にかけての北海道内の考古遺跡から出土しており、「アイヌ文化期」の初期から重要な交易品だったことがうかがえる。また、個々の玉ではブルーの色が多く、それらの直径は3cm以上と世界的にみても大きく、経済的価値が高い。アイヌの女性は、クマ祭りなどの儀式の際にタマサイを身につけていた。当時、これらはアムール川流域からサハリンを経由して北海道にもたらされたとされるが、ガラス玉の生産地は、時代によって異なることが指摘してきた。さらに近年では、ガラスの成分分析の研究も進み、その流通ルートが明らかになりつつある。本公開研究会では、「北海道におけるガラス材質の変遷」「アイヌ文化のシトキの形成」「北方世界のガラス玉の流通について」という3つの発表を通して、アイヌ文化におけるガラス玉利用の実際とその社会経済的な意味を考えることがねらいである。これらをとおして、北東アジアの人々やものの移動や交流の実際について探ることができた。

国際シンポジウム

La Culture Populaire au Moyen-Orient: Approches Franco-Japonaises Croisées

日時：2017年3月27日(月)～28日(火)
場所：フランス社会科学高等研究院(EHESS)、パリ

主催：人間文化研究機構基幹研究プロジェクト 現代中東地域研究国立民族学博物館拠点、EHESS、Institut d'études de l'Islam et des sociétés du monde musulman (IISSMM)
企画：西尾哲夫、齋藤剛（神戸大学）、フランス・ブイヨン（EHESS）

現代中東地域研究民博拠点は、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業・現代中東地域研究の中心拠点として他の4大学拠点とともに大型国際共同研究を推進している。

今回、民博共同研究「個－世界論—中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」（代表・齋藤剛）と連携して、個が世界を紡ぎあげていく公共的コミュニケーション空間がグローバル化によって変容する中で、個の有する他者観が社会的心性としての世界観との間でどのような相互作用と相互変容を迎えてきたのかをテーマに、人間文化研究機構が学術協定を締結しているフランス社会科学高等研究院との共同事業として国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムでは現代中東の民衆文化に焦点をあて、既存の「民衆」概念では等閑に付されてきた「民衆文化」の編成とその資源としての活用という新たな現象の生起と、それに伴う人々のアイデンティティー、社会関係の再編が中東世界において新たな文化の再編／創造をもたらしている状況について、フランス側からは社会史的な視点、日本側からは民族誌的な視点から議論をおこなった。



公開講演会

メソアメリカとアンデスの古代文明と現在

日時：2017年7月1日（土）

場所：国立民族学博物館

主催：科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」（研究代表者：青山和夫〔茨城大学〕）、同研究A04班「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」（研究代表者：鈴木紀）

共催：国立民族学博物館

科研費・新学術

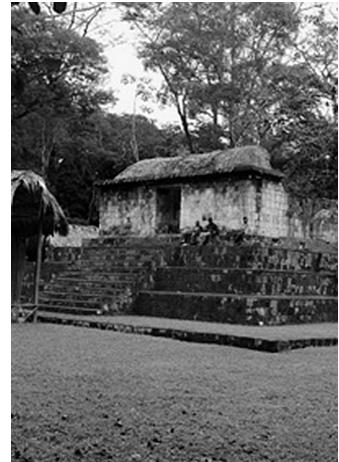
領域研究「古代アメリカの比較文明論」（2014年度～2018年度）の中間的な研究成果を公開するため、研究を構成する4班の若手研究者が講演を行った。

メソアメリカ考古学分野では、福原弘識（埼玉大学）が、メキシコ中央

高原の古代都市テオティワカンの国家形成過程を、住居址の変化から跡付けた。アンデス考古学分野では、江田真毅（北海道大学）がペルー南部のナスカ台地に描かれた鳥類の地上絵を鳥類形態学の視点から分類し、近隣の神殿遺跡から出土した鳥類の骨や羽毛との異同を考察した。

環境史分野では、大森貴之（東京大学）が、ワランゴ樹を手がかりに、年輪年代測定や放射性炭素年代測定等の手法によってアンデス地方の古環境を復元する方法を紹介した。文化人類学分野では、八木百合子（国立民族学博物館）が、ペルーの古都クスコのキリスト教聖人像用の衣装を製作する刺繡職人たちの間で、インカの太陽等の歴史的モチーフのデザインが選ばれる理由を考察した。

講演後、質疑応答が行われ、テオティワカンの人口増加を促した要因はなにか、ナスカの鳥の地上絵に足が描かれていることの意味はなにか等、講演内容をさらに深める議論が展開した。



◆ シンポジウム等

◆ 手話通訳者のための「みんぱくで手話言語学を学ぼう！」2017

日時：2017年6月3日（土）、6月10日（土）、7月8日（土）、7月22日（土）、7月29日（土）、8月5日（土）

企画：日本財団助成手話言語学研究部門プロジェクト

◆ 公開講演会「メソアメリカとアンデスの古代文明と現在」

日時：2017年7月1日（土）

企画：鈴木 紀 → 詳細 30 頁

◆ 『手話言語学関連』夏期集中講座「みんぱくで手話通訳士を目指そう！」

日時：2017年8月11日（金・祝）、8月12日（土）、8月13日（日）

企画：日本財団助成手話言語学研究部門プロジェクト

◆ 国際ワークショップ「博物館とディセンダントコミュニティおよびソースコミュニティとの協働—米国ニューメキシコ州 Mimbres 遺跡出土資料熟覧と遺跡実見を介したアート作品制作と展示計画」

日時：2017年8月28日（月）～9月2日（木）

主催：人間文化研究機構基幹研究フォーラム型情報ミュージアムの構築「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」

共催：ニューメキシコ州立大学附属博物館、科研費若手研究（A）「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究」（研究代表者・伊藤敦規）、科研費国際共同研究加速基金「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究」（研究代表者・伊藤敦規）

協力：ジェロニモ・スプリングス博物館

◆ 一般公開国際シンポジウム「カナダ先住民の歴史と現状」

日時：2017年9月9日（土）

共催：日本カナダ学会、国立民族学博物館

◆ 刊行物

Complete Texts of Umm Kulthūm's Lyrics.

Nobuo MIZUNO and Tetsuo NISHIO (eds.), Mar. 2017, Center for Modern Middle East Studies at the National Museum of Ethnology.

『東アジアで学ぶ文化人類学』

上水流久彦・太田心平・尾崎孝宏・川口幸大編、2017年4月、昭和堂。

『ウメサオタダオが語る、梅棹忠夫—アーカイブズの山を登る』

小長谷有紀著、2017年4月、ミネルヴァ書房。

『文化遺産と生きる』

飯田卓編、2017年5月、臨川書店。

『文明史のなかの文化遺産』

飯田卓編、2017年5月、臨川書店。

『なくなりそうな世界のことば』

吉岡乾著・西淑イラスト、2017年8月、創元社。